

令和元年6月21日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02786

研究課題名(和文)'to victory'タイプの結果句に対する語彙・構文論的分析

研究課題名(英文)A lexical-constructional account of resultatives involving 'to victory'

研究代表者

岩田 彩志 (Iwata, Seizi)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50232682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：従来の結果構文と異なり、to victoryという結果句を取る結果構文はUnique Path ConstraintとDirect Object Restrictionという2つの制約に従わない(She rode the horse to victory)。

これは、to victoryを伴う結果構文では状態変化が、動詞のforceでなく抽象的移動により引き起こされるためである。そのため、移動動詞が生じることは何ら問題にならない。また直接目的語が動詞のforceを受けているかどうか、が状態変化の成立に何の関連もないから、Direct Object Restrictionに従う必要もない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語における結果構文(He shouted himself hoarse)は、純粹に現象して面白いだけでなく、理論的にもどう説明すればよいかを巡って非常に多くの分析がされてきている。これまで様々な結果構文の事例が発掘されてきたが、本研究ではどの先行研究でも気づかれてこなかったタイプの結果構文を発見することが出来た。この新しいタイプの結果構文の発見により、これまでの結果構文の研究は、いくつかの点で根本的見直しが必要になることになる。さらにこのタイプの結果構文が移動文を基にしていることから、状態変化と移動現象との関連を巡る研究にも新たな可能性が生じてきた。

研究成果の概要(英文)： Unlike typical resultatives, resultatives with *\_to victory\_* violate the Unique Path Constraint (Goldberg 1995) and the Direct Object Restriction (Levin & Rappaport Hovav 1995). Thus in *\_She rode the horse to victory\_*, *\_ride\_* is a motion verb, and the result phrase is predicated of the subject, rather than the direct object.

This is because with resultatives involving *\_to victory\_*, the change of state is not brought about by the verbal force being exerted onto the direct object entity, but by the metaphorical motion. Other result phrases which behave like *\_to victory\_* are *\_to success\_*, *\_to safety\_*, and *\_to freedom\_*. These resultatives are instances of a different type of resultatives than have been recognized in the literature so far.

研究分野：人文学

キーワード：語彙・構文アプローチ 語彙意味論 構文理論 結果構文 way構文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年の語彙意味論において Goldberg (1995)の提案している Construction Grammar (構文文法)による分析が大きな流れとなっている。しかし Goldberg の分析では構文の役割を強調するあまり、動詞自体の役割が過小評価されているきらいがある。Jackendoff (1990), Pinker (1989), Levin & Rappaport Hovav (1995)といった生成理論内での語彙意味論研究の知見をもうまく取り込めるように、理論を修正・発展させていく必要がある。

研究代表者は、このような観点から研究を進めてきた結果、従来の生成語彙意味論的分析とも、Goldberg 流の構文分析とも違う、語彙・構文論的分析という独自の理論を展開するに至っている。その成果は、隔年で開催されている国際構文理論学会で発表されている(2001年(バークレー、アメリカ合衆国)、2002年(ヘルシンキ、フィンランド)、2004年(マルセイユ、フランス)、2006年(東京、日本)、2008年(テキサス・オースティン、アメリカ)、2010年(プラハ、チェコ)、2012年(ソウル、韓国)、2014年(オスナブリュック、ドイツ)。また English Language and Linguistics (2004), Cognitive Linguistics (2005), Language Sciences (2006), Linguistics (2008)といった海外の一流の学術雑誌にも論文が掲載され、海外の学者にも高く評価されている。

研究代表者は、語彙・構文論的アプローチにより結果構文の分析をしていく過程で、これまで気づかれていなかったタイプがあるらしいことに気付いた。そこで、今度はこのタイプを深く掘り下げる研究を行うことにした。

### 2. 研究の目的

結果句として to victory を従える結果構文は、従来の結果構文と異なる性質を持つ。まず、これまで移動動詞は結果句と共起できないとされてきた。例えば\*She ascended sick (彼女は山を登って気分が悪くなった)とは言えない(Goldberg (1995)の「単一経路の制約(Unique Path Constraint)」)。ところが She ran to victory のように、to victory という結果句は移動動詞とも共起できる。次に、結果句が叙述出来るのは目的語だけであるとされている。例えば\*I melted the steel hot (私は鋼鉄を溶かして、その結果、私は熱くなった)のように、結果句 hot が主語について叙述することは出来ない(Levin & Rappaport Hovav (1995)の「直接目的語制約(Direct Object Restriction)」)。ところが She rode the horse to victory (彼女はその馬に乗って勝利した)のように、to victory という結果句は主語についての叙述を行うことが出来る。

なぜ to victory がこのような特異な性質を持つのかを解明し、併せて同じような特性を持つ結果句は他にどのようなものがあるかを探求することが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

言語学関連図書の知見とコーパスの両面を活用して、to victory タイプ表現の例を出来るだけ広い範囲から集めた。主に3つのコーパス(British National Corpus, Wordbanks Corpus, Corpus of Contemporary American English)を活用し、どのようなタイプのデータがあるかだけでなく、どれくらいの頻度で生じるか、も調べた。収集したデータは、これまで明らかにならなかった語彙・構文論的アプローチの知見に照らしてその理論的意味合いを整理していった。

### 4. 研究成果

まず to victory を含む表現を、3つのコーパス(British National Corpus, Wordbanks Corpus, Corpus of Contemporary American English)で検索した結果、多数の例が見つかった(BNC: 158例、WB: 993例、COCA: 733例)。その中には、移動動詞と共起する例(He ran to victory)が多数見つかった。これは Unique Path Constraint に対する違反である。また Direct Object Restriction に違反する例もかなり見つかった(These two are the only runners to carry 57kg or more to victory)。

ただし、He ran to victory という例において、動詞 run が競技としての「走る」という意味で使われている。とすれば「移動」というよりも寧ろ「活動」を表しているのだから、必ずしも Unique Path Constraint に違反していないことになる。

さらに to victory を含む文では、活動がこの抽象的経路上を、goal の「勝利」へ向かって進んでいることになる。すると、to victory を含む文は抽象的移動を表す文ということになる。そしてここに、なぜ Direct Object Restriction に従わないのか、の理由がある。

通常の結果構文では、Croft (1998, 2012)や Rappaport Hovav & Levin (2001)の causal chain 分析でとらえられるように、直接目的語は動詞が及ぼす force の受け手になっている。そしてその force の結果、状態変化が生じる。そのようにある物に力を加えてその結果、状態変化が起こるならば、変化するのは、何か別の物でなく、必ずその力を加えられた物である。これは言わば当たり前の事である。この logic により、状態変化の主体は必然的に force-recipient とイコールになる。次に、英語では行為による働きかけがある場合は、主語でなく直接目的語が force-recipient になる。この二つを足し算すれば、状態変化の主体は直接目的語とイコー

ルになる。つまり直接目的語制約とは、force が加えられたらどの実体に変化が生じるかと、英語における直接目的語位置の意味的な役割とが組み合わさった結果、自動的に導かれることになる。

ところが、to victory を含む結果構文は、移動を表す文である。移動文では直接目的語が force-recipient でないから、Direct Object Restriction が当てはまらなくても、何も不思議ではない。このように、to victory を含む文が抽象的移動を表していると考えれば、二つの制約に違反しているように見える事実も、無理なく説明することが出来る。

次に to victory と同じような結果句があるかを探った。まず3つのコーパス (British National Corpus, Wordbanks Corpus, Corpus of Contemporary American English) で to success を検索した結果、一定数の例が見つかった (BNC: 8 例、WB: 9 例、COCA: 57 例)。to victory の場合より数はかなり少ないが、移動動詞と共起する例 (the Kings were skating to success) や、Direct Object Restriction に違反する例 (Smart companies will get ahead of that wave, and ride it to success and prosperity.) が見つかった。基本的には to victory と同じく、抽象的移動の抽象的 goal を表す結果句であると結論づけることが出来る。

なお、結果構文としての例は多くなかったが、Carmen Miranda sang and danced her way to success のように、way 構文に to success が生じる例が比較的多く見つかった (BNC: 14 例、WB: 3 例、COCA: 25 例)。このことは、way 構文が基本的に移動表現であることを考えれば、to success が抽象的 goal を表す結果句であるとする分析を支持するものと言える。

次に to fame を、同様に3つのコーパスで検索した。相当数が見つかった (BNC: 41 例、WB: 222 例、COCA: 149 例) が、そのほぼ全てが Johnstone shot to fame のような例だった。ここで shoot は文字通りの「撃つ」という意味でなく、メタファー的に解釈されており、「急激に有名になった」という意味を表している。つまり動詞がそもそも状態変化動詞になっているから、厳密には結果構文とは言えないことになる。to fame は、to victory と少し違うタイプと考えざるを得ない。

次に、to safety を調査した。まず3つのコーパス (British National Corpus, Wordbanks Corpus, Corpus of Contemporary American English) で to safety を検索した結果、かなりの実例が見つかった (BNC: 275 例、WB: 591 例、COCA: 1041 例)。そしてこれらの実例の中には、移動動詞と共起する例 (he walks across a tightrope to safety) や、Direct Object Restriction に違反する例 (About 1 million had reportedly already crossed the border to safety.) が見つかった。これらの点で、to victory と似ている。しかし to victory とは異なり、to safety は「安全な場所に (移動する)」という意味を表す。つまり、抽象的移動でなく空間的移動により状態変化が起こされている、と分析することが出来る。

最後に、to freedom について、3つのコーパスで実例を探した (BNC: 19 例、WB: 55 例、COCA: 235 例)。そしてこれらの中には、やはり移動動詞と共起する例 (Andy crawled to freedom) や、Direct Object Restriction に違反する例 (many Germans crossed the borders illegally to freedom to West Germany) が見つかった。これらの文は、「拘束されない場所に移動する」という意味を表し、to safety と同じように分析できる。

以上のことから、to victory ・ to success を従える結果構文は、「抽象的移動に基づく状態変化」を表す結果構文であり、to safety ・ to freedom を従える結果構文は、「空間的移動に基づく状態変化」を表す結果構文である。いずれも、これまでの先行研究では気づかれていなかった、全く新しいタイプの結果構文であると結論づけることが出来る。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Iwata, Seizi 'State-maintaining' causatives: A close kin to resultatives.  
Language Sciences 有 64 2017 103-129 DOI: 10.1016/j.langsci.2017.07.004

〔学会発表〕(計2件)

岩田彩志、直接目的語制約に従わない結果構文、第36回日本英語学会、2018年11月25日、横浜国立大学

Iwata, Seizi Two types of 'find one's way': A lexical-constructional account.  
Constructional Semantics: Cognitive, Functional and Typological Approaches.2018年8月25日、University of Helsinki, Finland.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。